

「なぜ薔薇は愛されるのか～西洋のバラ・庄内のばら～」  
に関する報告

遠山 茂樹

東北公益文科大学総合研究論集第48号 抜刷

2024年8月30日発行

## シンポジウム等記録

# 「なぜ薔薇は愛されるのか～西洋のバラ・庄内のぼら～」 に関する報告

遠山 茂樹

### 1 「なぜ薔薇は愛されるのか～西洋のバラ・庄内のぼら～」の趣旨について

令和6年（2024）3月20日、東北公益文科大学鶴岡キャンパスにおいて、「なぜ薔薇は愛されるのか～西洋のバラ・庄内のぼら～」が開催された。本企画は、鶴岡タウンキャンパスを所在とする東北公益文科大学大学院、鶴岡市（致道ライブラリー）、慶應義塾大学先端生命科学研究所による連携企画である「市民と学ぶ 今の私たちが未来に繋ぐ、繋がるということ」の第2回目の企画となる。

本企画については、昨年開催された「西洋と日本の『プラントハンター』が描いた夢」に関する報告の中で、門松秀樹東北公益文科大学教授が簡潔にまとめているので、以下に引用する。「鶴岡タウンキャンパスという研究・教育における拠点は、市民にとって有用な知的資源でもある。学術研究の成果を、分りやすく、また親しみやすい形で市民に還元することで、市民が自らの知的好奇心を充足し、鶴岡タウンキャンパスに対する市民の関心をより高めていくことで、各研究機関に対する理解も深化し、その研究活動も一層活性化していくと考えられる。このため、まずは、サロンのようなイメージで、気軽に市民が参加することができ、楽しみながら知的好奇心を満たすことができるように本企画が開催された」（『東北公益文科大学総合研究論集』第45号、2023年7月31日発行、133頁）。

3月20日、冒頭に武田真理子東北公益文科大学大学院研究科長より、本企画についての開催趣旨が説明された後、若松邦彦あつみ観光協会顧問より「なぜ薔薇は愛されるのか～鶴岡のぼら～」（講演時間20分：午後1時40分～2時00分）と題する講演が、次いで、遠山茂樹東北公益文科大学名誉教授により「なぜ薔薇は愛されるのか～西洋のバラ～」（講演時間90分：午後2時00分～3時30分）と題する講演がそれぞれ行われた。

以下に、「なぜ薔薇は愛されるのか～鶴岡のぼら～」及び「なぜ薔薇は愛され

るのか～西洋のバラ～」のそれぞれの講演の概要について報告する。

## 2 「なぜ薔薇は愛されるのか～鶴岡のばら～」

あつみ温泉ばら園は、庄内唯一のバラ公園で、昭和37年に熊野神社奉納相撲場だった場所を整備しつくられた。鶴岡バラ会（会員数は約350名）よりばらの苗木300株の寄付を、また、地元橋屋の棟主より150株いただき、その基礎が築かれた。昭和37年の温海町観光協会報には、昭和37年に鶴岡バラ会より苗木300本が寄贈され、元日本バラ会浅田会長さんに設計していただき、温海バラ公園ができたことが記されているが、「バラ園の設計者、浅田先生は日本バラ会が創られて以来、長く会長をされた斯界の権威者で、皇后陛下のお庭や吉田茂元首相のバラ園の指導などもなされたという」（温海町観光協会報、昭和37年9月10日、温海町観光協会発行）。

平成24年には鶴岡公園東側の改修工事に伴ってバラ園が縮小されることになり、鶴岡市から公園のバラ231本が温海温泉バラ公園に移植されることになった。同年11月2日、温海温泉バラ公園で植樹祭がおこなわれ、鶴岡公園にあった殿様の薔薇もこの地に移植された。

荘内神社宮司石原純一氏は、その経緯について次のように述べている。酒井家第16代酒井忠良公は薔薇の花をこよなく愛し、致道博物館内の国の重要文化財「旧西田川群役所」の前庭に、公みずからがお手入れされた見事なバラ園があった。全国から珍しい品種を収集し、好評を博していた。その後、「殿様の愛した薔薇」は博物館の整備事業のために鶴岡公園内の庄内神社大鳥居北側に移植され、「鶴岡公園バラ園」を造成した。四季咲きのバラは、季節になると一面に見事な花を開花させ、甘い香りを漂わせていた。昭和50年代まで「鶴岡ばら会」があり、会員たちによって薔薇がさかんに植えられ、手入れも行われていた。その後、鶴岡公園整備計画によって「バラ園」を縮小することとなり、「温海温泉バラ園」に移されることになった。

鶴岡バラ会は昭和29年に創設され、会員たちは熱心に栽培技術を研究し、東京の鳩山邸や白木屋の展覧会にも足を運ぶなど活発に活動していた。昭和38年、木根淵善吉会長は、会誌に次のように記している。

「鶴岡のいたるところ、バラ会会員で管理した内川川端バラ花壇、鶴岡公園バ

ラ花壇、大山街道バラ花壇、酒田街道バラ花壇にバラがうえられているのを旅行者はうらやましく思っている。酒井家のバラは他地方、または中央まで知られており、先代（酒井忠篤）の貴族的バラ栽培を酒井忠良氏が一般に公開して地元の方々の楽しみまでにいった」。]

現在、温海温泉のバラ公園には90種3000株のバラが植えられ、6月から10月にかけて、地元住民をはじめ多くの訪問客で賑わっている。平成24年に鶴岡公園から移植された「荘内藩殿様の薔薇」も多くの人に親しまれている。殿様が愛したばらは、殿様を敬愛する鶴岡市民によって愛されてきた。これからは是非「ばらの温泉」である温海温泉、そしてバラ公園へお越しいただきたいと願っている。

### 3 「なぜ薔薇は愛されるのか～西洋のバラ～」

なぜ薔薇は愛されるのか。ここでは西洋のバラをめぐる文化史的な話題を中心に、絵画も交えながら話をすすめていきたい。

#### 3-1 オールド・ローズ

バラの仲間は北半球を中心に約300種以上の原種が知られているが、18世紀後半に中国から四季咲きのバラが伝来するまで、西欧の庭で栽培されていたバラの品種は意外なほど少なく、わずか4つにすぎなかった。それらは現在オールド・ローズあるいはオールド・ガーデン・ローズと呼ばれている。具体的にいえば、アルバ、ガリカ、ダマスケナ、ケンティフォリアである。

アルバ種のバラは古くから西欧で栽培されてきた白いバラで、たとえば、北方ルネサンス期を代表する画家のひとり、ルーカス・クラナハ（父）の作品《聖ドロテア》に描かれているバラが本種のバラであるといわれている。また、ルネサンスの画家ボッティチェリの有名な《ヴィーナスの誕生》では、淡いピンクのやや平べったいバラが描かれているが、これはロサ・アルバの園芸品種で半八重咲きのセミプレナと推測されている。

これに対して、ガリカ種のバラは赤いバラで、エミール・ガレの連作《フランスの薔薇》のモチーフとなったのが本種のバラである。ガレの「うなだれた」赤いバラは、普仏戦争で失われた故郷ロレーヌ地方のサンカンタン山に咲く赤

いバラであった。また、ロサ・ガリカの園芸品種であるオフィキナリスのバラは半八重の赤い花をつける。このバラは、「薬剤師のバラ」ともいわれ、シャンパーニュ地方の古都プロヴァンから西欧各地に広まった。イギリスのバラ戦争の際にランカスター家の紋章となったのが、この赤いバラである。

ダマスケナ種のバラは、ダマスクローズの名でよく知られている。原産地はイランで、強い芳香を放ち、13世紀にシリアのダマスクスからフランスにもたらされたといわれている。このバラは香りがよいため、もっぱらバラ水をつくるために栽培された。言い伝えによれば、イスラムの英雄サラディンは奪回したエルサレムのモスクを洗い清めるためにダマスクローズでつくったバラ水を使用したという。

ケンティフォリア種は、葉ボタンのように花卉が密生しているところから、キャベジローズの英名がついた。このバラは別名プロヴァンスローズともいい、17世紀にイランからオランダに入り、そこから西欧各地に広まった。華やかな大輪咲きで、エリザベート＝ルイーゼ・ヴィージェルブラン《シュミーズ・ドレスを着たマリー・アントワネット》で王妃マリー・アントワネットが手にしているバラが本種のバラにあたる。

### 3-2 古代ギリシア・ローマのバラ

バラは、今日では一般に鑑賞用として、あるいは香料や香水用に使われているが、古代ギリシア・ローマでは花冠、花輪によく用いられ、専門的な花冠職人もいたほどである。古代ローマでは、バラは最も珍重された花で、料理から宗教行事まで幅広く用いられ、日常生活の一部となっていた。さらに、バラは古くから薬用としても用いられた。

古代ギリシアのテオプラストス（前371年頃～前287年頃）の『植物誌』や古代ローマの大プリニウス（後23～79）の『博物誌』には、バラの主要な産地が記されている。それを列挙してみると、ピリッポイ（マケドニア東部）、プラエネステ（イタリア中西部）、カンパニア（イタリア南西部）、ミレトス（アナトリア半島西海岸）、トラキス（ギリシア中部）、アラバンダ（ミレトス東方）、キュレネ（リビア）、それにスペインやカルタゴ（チュニジア）である。これらの古代都市は西暦24年（プリニウス生誕の翌年）にはすべてローマ帝国の版図に含

まれていた。古代ローマ帝国の「パンと見世物」はローマの穀倉と呼ばれたエジプトなくして成立しなかったが、バラの恒常的な供給も属州あつてのものだった。

ローマの政治家で弁論家のキケロは、シチリア総督であつたガイウス・ウェレスに対する糾弾演説（前70）のなかで、ウェレスがバラの花弁がぎっしり詰まった枕で眠り、鼻の下にはバラの匂い袋をぶら下げていたとして、その怠惰で快樂的な生活を厳しく非難している。キケロにとってバラは度を越した消費の象徴であり、贅の極みであつた。ローマ皇帝の倒錯したバラへの偏愛は、ローレンス・アルマ＝タデマの作品《ヘリオガバルスの薔薇》にみてとれる。

### 3-3 中世ヨーロッパのバラ

初期のキリスト教徒たちは、バラを快樂主義と結びついた異教的な花とみなしていた。しかし、3世紀からバラは徐々に復権してくる。4世紀のミラノの司教アンブロシウスは、説教のなかであらまし次のよう説いた。かつてエデンの園に咲いていたバラには棘がなかった。ところが、アダムとイヴが神に背き、園から追放された時に、バラは棘で覆われた。棘は樂園が失われたことを思い出させるためにつけられたのである。その一方で、バラの花が美しく芳しいのは、樂園をいつまでも忘れないようにするためであつた。換言すれば、バラにある棘はアダムとイヴがおかした原罪の象徴であつた。棘には厄介者のイメージがつきまとうが、その棘にも重要な含意があるというわけである（「棘のパラドックス！」）。

アンブロシウスによれば、聖母マリアは原罪を免れた「棘のないバラ」である。罪が存在しない樂園に咲く、棘のないバラというモチーフは、絵画のなかでも繰り返し登場することになる。たとえば、サンドロ・ボッティチェリの晩年の傑作《眠るキリストと祈る聖母》には、聖母マリアとその足元でまどろむ（「死」を暗示）幼子イエス、そして棘のないバラが描かれている。こうして、言うなればキリスト教はバラから棘を抜いたのである。

12世紀に活躍したシトー会派の修道院長ベルナルドによれば、「マリアは、その純潔さゆえに白いバラであり、その慈愛のゆえに赤いバラである。マリアの肉体は白色であり、その魂は赤色である」。白いバラは聖母マリアの純潔を、赤

いバラは聖母の慈愛あるいは受難を象徴する。バラは受胎告知の絵画でおなじみのユリとちがいで、赤と白の二色ある。しかも棘がある。そして、上述のように、花も棘もそれぞれにキリスト教の文脈で重要な意味を付与された。中世にあっては、バラもキリスト教化されたと言ふべきか。

13世紀ともなれば、バラは「花の中の花」に位置づけられ、最上位の地位を占めることになる。ヨーク大聖堂やウェストミンスター大聖堂の聖堂参事会室に残された銘文がそれを裏づけている。バラが「花の中の花」になった13世紀はマリア信仰の最盛期でもあり、大聖堂には聖母に捧げられたバラ窓が設けられた。バラ窓から差し込む光は「奇しきバラ」、すなわち聖母マリアが照らし出す慈愛の光であった。

### 3-4 近世イギリスのバラ

印刷業者リチャード・バンクスによって出版された『バンクスの本草書』（1525年、著者は不明）は、印刷された本草書としてはイギリス最古のものである。それによると、「乾燥したバラを鼻に近づけて匂いを嗅ぐと、脳や心臓を活性化させ、元気づける」という。また、バラ水は目薬として使用され、軟膏は顔面に塗ってシミ取りに使われた。16世紀を代表するイギリスの植物学者ジョン・ジェラード（1545～1612）は、『本草書』（1597年）の中で、次のように述べている。

「バラは棘だらけの低木ではあるが、同類のありふれた茨のなかに入れるよりも、この世で最も美しい花々といっしょに植えるのがふさわしい。というのも、バラはあらゆる花のなかで最も重要で、中心を占めるに値するからである。バラはその美しさ、薬効、そして芳香によって称賛されるが、それだけではない。バラはイングランドの王笏を飾る榮譽ある花であり、さらにランカスター家とヨーク家という最も高貴な二つの家系を結びつけた由緒ある花でもある。まさにそれゆえに称賛に値するのである」（拙訳）。

ジェラードによれば、バラは花の中でも中心的な位置を占めている。それゆえ、同類の茨といっしょにしてはならず、美しい花々とともに植栽されるべきなのである。ここには中世以来のバラ観、すなわちバラは「花の中の花」という見方が示されている。また、バラには三つの美点があるという。すなわち、バ

ラは美しく、薬効があり、芳香を放つ。さらに、バラは王笏を飾る栄誉ある花であり、二つの高貴な家柄を結びつけた由緒ある花でもある。

イギリスでは、百年戦争の終結後、バラ戦争（1455～85）と呼ばれる内乱が起こる。よく知られているように、これはランカスター家とヨーク家の王位継承権争いで、それぞれ赤バラ（「薬剤師のバラ」）と白バラ（ロサ・アルバ）を家紋にしていたことから、両者の争いはバラ戦争と呼ばれる。最終的には、ランカスター家の一族であるテューダー家のヘンリーが、ヨーク家のリチャード3世を打ち破り、勝利した。ヘンリーはテューダー朝を開いてヘンリー7世として即位、ヨーク家のエリザベスと結婚することで両家の争いに終止符が打たれた。

ジェラードがバラは二つの高貴な家柄を結びつけた由緒ある花と述べているのは、こうした歴史をふまえてのことだった。テューダー朝の紋章は赤と白のバラを組み合わせで作られた。この新しいテューダー・ローズは、たとえばハンス・ホルバインの《トマス・モアの肖像画》やニコラス・ヒリアードの《エリザベス1世の肖像》、あるいはイングランド王ジェームズ1世（スコットランド王としてはジェームズ6世）のペニー硬貨にみとれる。ともあれ、バラが王室と結びついたことは、イギリス人のバラ愛好熱を考えるうえで、大きな意味もっているように思われる。

### 3-5 19世紀の「バラ革命」

19世紀初めまで、西欧で栽培されていたバラは、わずか4系統にすぎなかった。そこに中国のコウシンバラ、日本のノイバラが相次いで導入されたことで、西欧の園芸界ではバラの一大革命が起こる。四季咲き性のコウシンバラと耐寒性をもつ日本のノイバラが西欧のバラ園芸を一変させたのである。

中国から入った種<sup>たね</sup>バラは4つである。スレイターズ・クリムゾン・チャイナは深紅のバラで、半八重咲き。香りもよい。パーソンズ・ピンク・チャイナはピンクのバラで、低木性だが、高さは3メートルにも達する。ヒュームズ・ブラッシュ・ティーセンチッド・チャイナは淡いピンクのバラで、その芳醇な香りが紅茶にたとえられた。パークス・イエロー・ティーセンチッド・チャイナは淡い黄色のバラで、これも紅茶に似た芳香をもっていた。これら4種の

コウシンバラの導入には東インド会社が深くかかわっていた。バラは紅茶とともに東インド会社の船でイギリスに運ばれてきたのである。

イギリス東インド会社が広東から茶を輸入するようになるのは1704年のことで、1721年には中国からの茶の輸入を独占するに至る。イギリスでは年を追うごとに紅茶の需要が高まり、1784年には茶の関税が大幅に引き下げられることになる。これを契機に紅茶の価格も大幅に下がり、紅茶の大衆化に拍車がかかった。19世紀に入ると、紅茶は地方の貧しい農民や都市の労働者のあいだでも飲まれるようになるのである。

中国から入った上記4つの種バラがブリテン島で開花するのは、18世紀末から19世紀初めのことである。具体的には、スレイターズ・クリムゾン・チャイナが1791年、パーソンズ・ピンク・チャイナが1793年、ヒュームズ・ブラッシュ・ティーセンチッド・チャイナが1810年、そしてパークス・イエロー・ティーセンチッド・チャイナが1824年である。こうした中国産のバラの導入時期は、紅茶の普及の時期と重なる。

とりわけ紅茶の香りのするバラは、ヴィクトリア朝（1837～1901）に一大ブームを引き起こした。当時のあるバラの育種家は、次のように述べている。「バラが花の女王であるとするれば、紅茶の香りのするバラは、女王の中の女王といえるかもしれない。というのも、巷間‘お茶（Teas）’と呼ばれているその種のバラは、粗野で色も薄い近縁種のバラに比べるとずっと優美で上品だからだ」。

19世紀ヴィクトリア朝のイギリスで、紅茶の香りのするバラが人気を博したのも単なる偶然ではなかった。というのも、紅茶がイギリス人の国民的飲料となったのがまさにヴィクトリア朝の時代で、いみじくも当時の育種家が述べているように、紅茶の香りのするバラは、紅茶そのものだったのだ。

### 3-6 ラ・フランスの誕生

1867年、ティー・ローズとハイブリッド・パーペチュアルとの交配により「ラ・フランス」が誕生した。作者者はフランスの育種家ジャン＝バティスト・アンドレ・ギョー。バラ育種会社・ギョー社の2代目で、初代の創業者ジャン＝バティスト・ギョーの息子にあたる。「ラ・フランス」は、先の尖った剣弁高芯咲きで、淡いピンク色の太輪のバラである。この花は、バラのイメージを一

新した。オールド・ローズにはない多彩な花色と四季咲き性を獲得した「ラ・フランス」は、ハイブリッド・ティー第一号とされる、最初のモダン・ローズである。一般に、それ以前のバラはオールド・ローズ、それ以後のバラはモダン・ローズと呼ばれる。「ラ・フランス」の誕生以降、剣弁高芯咲きで、大輪四季咲きのハイブリッド・ティーが主流となる。

その後、ギョーは1875年にポリアンサ・ローズと呼ばれる房咲きの新作を発表する。その交配に使われたのが、中国のコウシンバラと寒さに強く、小さい白花を房状に咲かせる日本のノイバラであった。ノイバラは、日本全土に自生する野生バラの代表ともいえるもので、万葉の頃から知られている。

つる性のバラは総称してツルバラと呼ばれる。このツルバラの改良に欠かせないものとして脚光を浴びたのが、ノイバラに続いて19世紀に日本からヨーロッパに渡ったテリハノイバラであった。テリハノイバラは光沢のある葉をもつため「照り葉」と呼ばれ、鋭い棘をもつ。19世紀末から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパでは、この日本のテリハノイバラとハイブリッド・ティー・ローズなどが交配され、相次いで新種のツルバラが誕生する。西洋のイメージが強いバラだが、今日われわれが目にする園芸品種のバラの作出には東洋、すなわち、中国と日本のバラが大きくかかわっていたのである。

古代ギリシアにおいて愛と美の女神アフロディテの象徴であったバラは、中世では聖母マリアを象徴するものとなった。近世イギリスでは、バラは王家の紋章となり、今日の連合王国イギリスの一角を構成するイングランドの国花となった。19世紀、中国からイギリスに持ち込まれた東洋のバラは、紅茶を積載した東インド会社の船で運ばれた。紅茶がイギリス人の国民的飲料となったのと時を同じくして、紅茶の香りのするバラも人気を博した。ヴィクトリア朝のイギリス人にとって、バラは「もうひとつの」紅茶だったのだ。

この事業は、令和5年度庄内開発協議会補助事業「公益のふるさとづくり活動補助事業」として実施されました。